

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 163号

平成27年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (12)

主・イエス・キリスト

人間が神を作ったかどうかということだが、イエス・キリスト自身が神であるか、人間がイエスをキリストに仕立て上げたのか。主・イエス・キリストの名には三つの意味がある。イエスは人間であり、キリストはユダヤの救いであり、主は人類のさばき主・人類の救い主である。聖書にこう書いてあるから信じる。そうとしか言えんな。人類は聖霊によらなければイエスは主であるとはいえないのだから。

曾直な感じを言ってみればこれは私の感じだが、キリストの霊は初めからあったんじゃないだろう。釈迦、ソクラテス、孔子などはキリストの霊を受けているかも知れん。“父・子・聖霊”という言葉がその民族にないからであって互いに無関係ではなかろうと思う。

今ちょっと思い出したんだが、私の考えを言うと、共観福音書というのはイエスを語っている。ヨハネ伝はキリストを語っている。その他の書簡や使徒行伝などは、主を語っていると思う。初めから難しいことを教理として言ったらとりつきようがないから、色々な人をキリスト教に引っ張り込むために色々書いてあるのかも知れんよ。

(昭和 40 年 6 月 8 日 金曜日)

阪井徳太郎先生

今夜は阪井先生が亡くなられてから6年目なので(6月8日昇天)その追悼の意味で思い出話を2,3話す。その前にこの間私の勤めていた安田信託の創立40周年記念会に出た。私は大阪の人事課の平重役でありましたが、その当時は社長その他の上役には何か階級的に上であるとの意識を持っておりあくせくしておった。この間の会に出て今は社長とか専務とかにこだわらず、“君””おれ”で話が出来た。上席も何もあったものではない。私が一番上席に座った。

さて阪井先生は三井財閥の総元締めである「三井合名」の数人の理事の一人であった。92歳で亡くなられた。先生は60歳代から、ご病気続きで人生の3分の1は病床の人であった。先生の外交上の活躍や(司会者注:ポーツマス会議の下準備を小村寿太郎外相のもとでルーズベルトとやり成功を収めた。会長はルーズベルトの学友である。)三井での業績は今度の戦争でほとんどなくなってしまった。財産もしかりである。しかしこれらの者は当然過ぎ去るものである。諸君は会長先生がどういう精神で仕事をされたかを注意すべきである。先生は奮闘努力のかたまりである。またそのことを同志会でも言われた。

私は先生の最後の数年、毎月先生を訪ねた。先生の信仰は、この

病の30年で磨きかけられ内に深くなった。私が外会員からのお金
数万円を会長先生に持って行った時に先生は非常に感謝し喜んで受
け取られた。この金は先生の全盛時代からみればはした金であった
が、先生は少しもそのことを出さずに謙虚に受けられた。また先生
は私のようなものを“小西先生”と呼ばれた。実に謙遜であった。

(昭和40年6月18日 金曜会 阪井会長先生6周年追悼会)

同志会時代の友人

大正 9 年同志会に 5 人入った。菊井維大、工藤鉄太郎、渡部武、橋本耕三、小西芳之助の 5 人のうち 2 人（注：渡部武、橋本耕三）がすでに亡くなった。諸君も同志会を出て 45 年たってから会えるように。菊井維大兄と私とは歩む道も違い、なした業績も大いに違う。しかしこうして隣り合わせに座ると同じだ。

今司会者が読んでくれた聖書（注 コリント人への第 1 の手紙 15 : 58）は僕の好きなところだが、聖書は他の外国語とともに読め。例えば今日のところは、「いつも全力を注ぎつつ、堅く建って動かされるな」と訳すべきだ。Revised Version にはそのことがはっきり書いてある。

（昭和 40 年 7 月 2 日 金曜会）

狭き門より入れ

コリント前後書を読むとキリスト教は万人受けするものではない。特別の人が霊のことは霊によってわかるのである。そんなに大勢信じなくてもいいものらしい。自分の話したことを誰か聞いてくれたらそれでいいのだ。信仰すると善をなす力が出て来なくてはならない。人生の宝である。命に至る道は狭く、滅びに至る道は広い。多くの人に賛成を求める必要なし。命に至る者は少ないと聖書に書いてある。十字架によって罪を贖われ、神の子とされ、永遠の命を持つということをパウロは伝えている。数年前ロマ書を学んだ。ロマ書は理論的であり、体系だっており説明がしてあるが、コリント書には何も説明がなく、信仰するにはどうすればいいかを教える。昔友人が本の扉にドイツ語で“狭き門より入れ”と書いたドイツ語の聖書をくれたが、この頃しみじみとその意味が分るようになった。イエスによってやわらげられた神の愛を信じて受けるようになるというのがロマ書、コリント書の唯一の点である。何ととってもキリスト教の中心は永遠の命に通じている。この世にあるよりもキリストとともにいる方が望ましいとパウロは言っている。パウロの源はそういったところにあるのだ。（昭和40年10月15日 金曜会）

イエスに対する態度の3つ

パウロの勉強をしています。ガラテヤ書に入りました。キリスト・イエスに対する態度に3つあるように思う。

1 キリストを手本として人生を学んで生きる。これを律法主義と考える。

2 キリストを救い主として信じるのが救われるための一条件であり、さらにキリストにならう善行が救いに必要だと考えるもの。信仰と善行・道徳。

3 我々の善行を必要としない。キリストを信じることで救われる。ただし、救われたものは神の子として生きるのは当然だ。

我々は3つ目の立場に立つ時に安心を得、良心の自由を持つことができる。人は社会のそれぞれの場にて、この良心の自由を持つ時人に尽くすことができる。ルターは注釈書の最後でそれを述べている。ダニエル書に言う自分の道を進み行けということ、そしてルターを通して信仰ということが分かってきた。

(昭和40年11月5日 金曜日)

キリスト教で、平安・知恵・力がのぞむのは

信仰は自分の理性・知性・経験で理解できないことでも、聖書で本当であると教えられていることをまことと信じることである。理性・経験で理解できないことを放っておいて信者と称するのは越権である。キリスト教のそういう面がなければそれは道德に過ぎず、真の平安・知恵・力はのぞまない。そういうことがあるということ、すなわち社会・自然科学と範囲を異にしている面があることを知ってキリスト教の勉強をすべきである。

(昭和 41 年 1 月 21 日 金曜会)

信仰的な生き方

Chaplain Assistant として。ここにいる間に信仰ということ
勉強してもらいたい。難しいことではない。人間の生き方には「知
的理解によるもの」と「信仰的理解によるもの」と2つある。

信仰的な生き方というのは、自分の知恵によらないもの。我々は
自分の知恵でやってくる癖がついている。しかし、人間の知恵と違
うことで他者がこうやれと言うと、分からなくてもそうかと信じる
生き方がある。それによって自分の知恵では不可能なことができる。
これを信仰によって生きると言う。信仰とは自分ではなく他者であ
る。従う。従うのみ。Perfect submission is perfect.

(昭和 41 年 4 月 22 日 金曜会 署名式)

天国は力

先生、先輩も少なく静かな金曜会である。聖書に人の命は持ち物の大きさによらないとあるが、この持ち物とはもちろん物的、知的なものではない。そのような命をポーロは、天国は言葉ではない、力であると言っている。そしてポーロはその力を持っていた。これが福音である。

(昭和 41 年 5 月 13 日 金曜会)